

## 1 学校の特徴

第一学院高等学校 高萩校は、その教育目標に「社会で活躍できる人づくり」を目指し、「1/1 (いちぶんのいち)の教育」を教育理念に掲げている。

生徒をプラス思考に変える独自の意欲喚起教育「プラスサイクル指導」を基軸とし、独自のキャリア教育である「地域全体を“学校”と捉えた教育『コミュニティ共育』」の推進、アンガーマネジメントの手法を積極的に取り入れ、生徒個々の自他肯定感を高め、生徒一人ひとりの「『もっともっと自分を好きになる』自分づくり」をサポートしている。

そのため、今後の社会の変化を見据えた教育の改革に向けて、生徒の成長度の可視化を目的とした「デジタル自分未来史ファイル (通称：D-FILE)」【成長の軌跡を残すeポートフォリオと成長の実感を表す独自の「成長度マップ」】に取り組んでいる。

また、教科学習においては、「生徒の学習意欲の向上」と「(基礎)学力の定着」を目的に全生徒にタブレット端末を必須として、独自のICT教育を展開し、第一学院独自の個別最適化・自立型学習法 (通称：マイプラ) を展開し、通信制と親和性の高いICTを推進することで、より多くの学びの利便性と創造性を高めようと努めている。

通信制課程の本校には、スポーツや芸能活動などの夢の実現と学業との両立を目指す生徒のほかにも、不登校や高校中退等を経験した生徒が多数在籍・卒業している。そのような多様な生徒たちが、それぞれの希望する進路を実現できるよう、生徒一人ひとりの「チャレンジ・再チャレンジ」を支援し、すべてを成長実感型とした、「生徒の成長度No.1」の学校を目指している。

その教育活動の一環として、高萩校で行なわれている本校スクーリングに関しては、令和5年度に約6,500名の生徒たちが参加した。通常の面接指導等以外に高萩市民講師による体験学習活動での小さな成功体験を通じ「達成する喜び (達成感)」や「他者へ貢献する喜び (貢献実感)」を体感させている。この今までにない経験からの学びや気づきにより、ひと回りもふた回りも大きく成長し、その経験は生徒自身が将来への夢や目標を意識するきっかけとなり、今後の人生の大きな糧となっているものと考えている。生徒たちにとっては、第一学院高等学校 高萩校が「母校」、高萩市は「第二のふるさと」であり、一生涯の高校生活の思い出として心に強く残っているにちがいない。

本校は、創立19周年を迎え、11月には生徒主体でのオンライン参加併用型の文化祭「橙萩祭」を行い、生徒の文化芸術活動の発露の場、仲間とのあいだで共同作業に邁進し達成感・成長実感の機会となっただけでなく、「他喜力」を発揮し、橙萩祭を通じて地域の皆様に日頃の感謝の気持ちを伝える事が出来た。開校準備からこれまで、高萩市民から多大な支援を頂き、現在も学校として顧客への貢献、社会への貢献を進めることができている。今後も、高萩市並びに高萩市民の方々に感謝の気持ちを持ち、更に尽力しようとしている。

第一学院高等学校 高萩校は、『建学の想い』である「常に素直な心」「夢を意識し、夢を持つ」「達成実感・貢献実感」を深化させ、生徒一人ひとりに応じた自他肯定感を育む教育 (1/1 (いちぶんのいち) の教育)、また、「生徒の現在 (いま) と将来の人生を左右する重責を前向きに担う」という使命を果たすべく、教職員・事務スタッフ全員で“社会で活躍できる人づくり”に全力で取り組んでいる。

## 2 学校の現況

- (1) 学校名：第一学院高等学校 高萩校 学校長名：川原井 勝雄
- (2) 課程：通信制 本科（普通科・総合学科）、専攻科
- (3) 職員数：合計207名（校長・教頭・教諭145名・養護教諭2名・講師12名・事務職員46名）（令和6年3月31日現在）
- (4) 学習センター数と内訳：学習センター30か所、通学生127名、通信生6,527名（本科生6,356名、専攻科生171名）（令和6年3月31日現在）
- (5) 免許状の延所有状況：  
国語30名 地歴33名 公民31名 社会8名  
数学18名 理科13名 芸術7名 保体18名  
家庭1名 情報6名 外語24名 実業6名  
養護2名 延べ計197名（令和6年3月31日現在）
- (6) 生徒数：  
・本科（普通科・総合学科）6,483名  
1年次 1,613名（男715名、女898名）  
2年次 2,262名（男1,017名、女1,245名）  
3年次 2,608名（男1,249名、女1,359名）  
・専攻科（保育通信課程）171名（令和6年3月31日現在）
- (7) スクーリング：  
・本科（普通科・総合学科）参加生徒数 6,380名（26回実施）  
・専攻科 参加生徒数 149名（6回実施）
- (8) 体験学習  
参加生徒数 延6,320名  
講座数 延349講座  
講師数 延720名

## 3 学校運営状況について

経営体制と学校運営の体制強化を目的に、経営側と学校側の意思疎通を図りながら運営している。「社会で活躍できる人づくりを実現できる最高の教育機関を目指す」というコーポレートビジョンを掲げ、「1／1（いちぶんのいち）の教育」の教育理念のもと、多様な教育ニーズに対応し、教育の質的向上に取り組んでいる。

生徒数は本科（総合学科・普通科）が6,483名（定員充足率86.4%）、専攻科が171名（定員充足率8.6%）と前年から本科は292名増加、専攻科は68名減少となっている。これまで顧客支持獲得及び経営努力により順調に業績確保をしてきているが、学校経営は少子化、競合学校の生徒獲得激化にあり、更なる顧客満足の向上に注力した取り組みが求められる。

株式会社立学校においては、学校法人立学校に比して、税制面・私学助成面において圧倒的な差異があり、学校経営の原資は、生徒・保護者の純粋な学費に因るところとなっており、不届の経営努力なくして業績確保は難しい。

今後も全国の学習センターとの連携強化を図り、共通して掲げた教育理念「1／1（いちぶんのいち）の教育」のもと、共通の教育像・学校像・生徒像を掲げ、通信制高等学校としての指導と付加価値を与える学習センターでの指導を、それぞれを指導する教職員・カリキュラム等に明確に位置付け、より安定した経営のためにも、各教科の指導体制の充実を図ることが求められる。

## 4 学習指導について

通信制高等学校は、毎日の学習は自学自習が主となり、多様なメディア（①教科書準拠動画を利用したWEB授業 ②放送〔NHK〕視聴報告）を利用した面接指導と高萩市でのスクーリング時に直接授業を行っている。

スクーリングでは、単なる一方向の学習指導の場となるだけでなく、生徒にとって主体的・対話的で深い学びの場となるよう創意工夫を凝らしており、その学びが、生徒一人一人の一生の財産となるよう、それぞれが地元に戻ってから人生をより豊かにすることができるよう生徒の意欲喚起に努めている。

本校通学生には、金曜日を登校日としてきめ細かな指導にあたっている（令和6年度より月曜日が登校日）。

各教科の報告課題は、レポートとして提出されているが、途中でレポート提出が滞る生徒もいる。各学習センターに所属する生徒は、学習センターでの教員によるレポート作成支援が重要になってくる。特区のため制約される中でも、引き続き教育の質を担保できるようより細かな指導に努めていくことが求められる。

とりわけ生徒により、学力の差が大きいため、基礎・基本を押さえ、個々に応じた課題を明確にし、教育の工夫の必要性があり、個別最適な学びにつながるよう引き続き丁寧な指導に努めていくことが求められる。

試験については、単位の認定のほか、その後の指導や生徒自身の学習の改善などに生かすために、個々の生徒の学習状況等を把握する上で重要な役割を担うものであり、各科目等の目標の実現に向けた学習状況を把握する観点から、レポートや面接指導等の内容と十分関連付けて実施している。

## 5 体験学習・生徒指導について

本校スクーリングにおいて地域参画の体験学習を、キャリア教育の一環として力を入れている。「豊かな自然の中」で、「異年齢の地域住民」から生徒が指導を受けることから、さまざまな「気づき」・「実感」が生まれ、生徒の将来を前向きに描き、今を意欲的に取り組む動機付けへと繋げている。

様々な生産活動やものづくりの体験学習を通じて、それらが現在の私たちの生活や社会の変容に果たしてきた役割や意義について考察し、豊かな生活、社会の創造のため、人々が紡いできた工夫や知恵に気づき、今後の自分の生き方、在り方を考える指針を表現し、主体的に他者とかかわり、よりよい人生を歩むための学びにプラス思考で向かえるようにしている。

年次を積み重ねることにより学びの蓄積・発展となるよう、農林業等にかかる体験活動を3分類（食料としてのものづくり〔農業生産・消費〕、生活を支えるものづくり〔実用品・工芸品〕、生活を豊かにするものづくり〔新たな商品価値〕）とし、生産・消費から新たな商品価値創造までの流れを知ることができるようにしている。生徒の取り組みは、個々に差はあるものの、全体的には意欲が見られ態度も良好である。

当年度で開校19年目になり、以前に経験したスクーリング時の実体験を通して、達成実感・貢献実感・成功実感・失敗体験等の積み重ねにより、生徒一人ひとりが様々な「気づき」から、態度にも変化が現れてきている。また、生徒指導も組織的に機能を果たしてきている。今後も本校の目指す「社会で活躍できる人材の育成」実現に向かって、さらに努力されたい。

体験学習で連携を共にするNPO法人「里山文化ネットワーク」においても、様々な工夫がなされ生徒の意欲付けに努力されている。体験学習の実施に際して、職業として長年従事してきた、特に農林業等の分野で豊富な経験を持つ高齢者やボランティアの専門家が中心となり指導にあたっている。今後も継続的・安定的に活動できるよう科目の充実をはかり、講師の確保・養成に努めていくよう連携をとっていただきたい。

通学生は、茨城県北地区（高萩、北茨城、日立）在住の生徒が半数以上を占め、茨城県中央地区や福島県浜通り地区（いわき市等）の県外からも通学してきている。

また、保護者に対して、「里山通信（家庭通信/学年通信）」を毎月発行し、学校の目標や方針、教育相談等を知らせることにより、理解・協力を得ている。

11月には、通学生が自ら企画した第16回文化祭「橙萩祭」を開催した。テーマ：「青春～最高の仲間と最高の思い出を～」には、生徒の、「高校生のうちでしか過ごせない今の仲間とだから、最高の思い出と共に、地元の人への感謝の言葉を表現したい」という思いがあり、そのテーマを自ら体現、文化祭はオープンスクールも兼ね、訪れた方（オンライン参加含む）に模擬店での接客、販売体験、展示作品やプレイルームのアテンド等、積極的に活動する生徒に共感が持てた。また、地域からの参加者（第16回橙萩祭は大部高萩市長、鈴木高萩副市長、石川デジタル副大臣兼内閣府副大臣、浅野衆議院議員、オンライン参加を含み来場者264人（昨年度150人））もあり、高萩市君田地区で栽培した大ぶりの大根をNPO法人里山文化ネットワークの方と生徒が協働で前日に収穫・販売し、盛況を呈していた。生徒も限られた時間の中で、懸命に取り組んだことによって生まれた自信と達成感は、今後の人生において大きな財産になると同時に、更なる「他喜力」発揮につながっている。

昨今のソーシャル・ネットワークキング・サービスの多様化、インターネットの低年齢利用化はどんどん進んでおり、情報モラル・リテラシー教育が重要であると認識しており、更なる実効性に取り組んでいただきたい。

（参考）

卒業生進路状況（令和6年5月1日 学校基本調査より） 卒業生2,495名

進学

・大学	722名
・短大	34名
・通信制大学	187名
・専門学校	694名
・専修・各種学校	5名
・高等学校専攻科	4名
・公共職業能力開発施設等	13名

就職 360名

その他 476名（受験浪人生や在家庭者）

## 6 スポーツコース（サッカー部）について

平成19年4月にスポーツコース（サッカー部）を創設しているが、創設の目的として、一つには、当校には不登校や引きこもり、高校中退・転校といった挫折を経験した生徒が多い中で、サッカー部の仲間が活躍することにより全国の在校生たちや当校を巣立った卒業生に元気と勇気を与え、母校に誇りを持ってもらいたいということが挙げられる。また、時間的制約の少ない通信制課程である点を有効に活用し、サッカーを通じて夢にのぞみたい若者のチャレンジの場の提供となっている。その趣旨で株式会社立高校として初めて高体連に加盟を認められ、全日制高校生と同じ大会に参加している。

本校サッカー部は、チームコンセプトに学校設置会社である株式会社ウィザスの「6つの実践」（肯定的思考・信頼・素直な心・考え抜く・感謝・尽力）・「4つの全力」（準備・頭・心・体の全力）を掲げている。また、当校の教育活動のベースである意欲喚起教育「プラスサイクル指導」をサッカー部にも取り入れている。「プラスサイクル指導」は、「楽しく意欲的に取り組む」「自分のためだけではなく自分以外（普段支えてくれている人たち）を喜ばせるために頑張る」「意識的にプラス思考を心がける」と脳の働きが活性化する、という最新の脳科学の研究成果を生徒指導に活用したもので、生徒自身が自分を意欲喚起していく力を引き出すものである。

これを通じてサッカー部の生徒たちは、チームの目標を明確化し、「厳しい練習をワクワク楽しむにはどうしたら良いか?」「今のピンチをどうしたら乗り越えられる?」といったことを、プラス思考で前向き・意欲的に考えるようになってきている。

目標達成をワクワクとイメージし、また、自分たちのためだけではなく、普段支えてくれている人たちに喜んでいただくために一致団結し、平成22年度第89回、平成23年度第90回全国高校サッカー選手権茨城県大会では2年連続で準優勝、平成26年度第93回全国高校サッカー選手権茨城県大会では初の優勝と全国大会出場を果たし、翌平成27年度第94回全国高校サッカー選手権茨城県大会では2年連続の全国大会まであと一步の準優勝を果たすことができた。

サッカー部では、年間を通じて、試合期・トレーニング期など、サッカーのスケジュールに合わせた生活を送っている。日中にトレーニングをし、通信制の特色を活かしたフレキシブルな時間での学習時間の確保を行っている。また、地域でのボランティア活動を通じた人格形成を行うとともに、併せてサッカーを極めるための知識など、アスリートとして必要な専門的なスキル・知識も学んでいる。

27名の部員が下宿生活（下宿以外は自宅通学）を送りながら、専属監督のもと専門のコーチ・スタッフ陣と選手たちが一丸となって練習を重ね、また、本校教職員の日常指導のサポートを通じて、創部17年目ながら着実に力を付けてきた。

令和5年度は、部員数51名（3年次18名・2年次14名・1年次19名）となり、高校クラブ活動としての土台作りに対し活気ある活動が実践できた。高橋監督を含め専門のスタッフの充実化も図り、IFAリーグ1部で着実に力を取り戻し、一層の強化並びに強豪復活への活躍が期待される。

当校のシンボルであるサッカー部の活躍が、高萩市・高萩市民はもとより全国で学ぶ当校生徒、また全国の通信制高校生に大いなる元気と勇気を与えることを実現すべく、更に部活動外の日常生活においても規律礼儀・自治自律独立・和衷協同を磨き人間力向上に日々精進していく必要がある。

### ■令和5年度における戦績

高円宮杯 JFA U-18 サッカーリーグ 2023 (IFAリーグ1部)	第5位
令和5年度茨城県高校サッカー新人大会トーナメント	準決勝敗退 (ベスト4)
令和5年度関東高校サッカー大会茨城県大会トーナメント	準々決勝敗退 (ベスト8)
令和5年度全国高校総体サッカー競技茨城県大会トーナメント	準々決勝敗退 (ベスト8)
第102回全国高校サッカー選手権大会茨城県大会トーナメント	準々決勝敗退 (ベスト8)

## 7 10年後をイメージするキャリアサポート

第一学院高等学校 高萩校は、生徒の社会での活躍を願い、高校入学から10年後の25歳を進路定着の目安と考えている。高校での3年間で見つけた夢や目標の実現に繋げるため、進路定着を意識した在学中の指導や卒業後の継続したキャリアサポートを行っている。

グループ内に、新潟産業大学およびその通信制課程のネットの大学@managaraを置き、その他にも就労移行支援事業も行い、社会での自立を図っている。

## 8 「高萩市教育特区」における経済効果等について

第一学院高等学校 高萩校は平成17年4月に開校し、丸19年が経過した。また、先般の東日本大震災で高萩市は大きな災害に見舞われたものの、10年以上経ち、市民関係者の尽力で復旧もだいぶ進み、元の姿に戻っている。しかし、福島第一原発事故の影響に加え今般の新型コロナウイルス感染拡大もあり、本校スクーリングに参加する生徒の不安を完全に払拭は出来ていないが、万全を期した体制で本校スクーリングを実施した。（平成28年度は放射線教員研修会を開き放射線に対し科学的な理解を深め、屋外場の除染を一部実施し、平成30年度後期から屋外での体験学習を実施。令和2年度は新型コロナウイルス感染防止対策として、検温・マスク着用・フェイスシールド着用・アルコール手指消毒・飛沫感染防止のためのアクリルパーテーション設置に加え、玄関へのアラーム付体表温感知サーモグラフィの設置、生徒登校前日に校舎内の次亜塩素酸ナトリウム希釈水による洗浄を実施。全生徒教職員に健康管理アプリを導入し体調管理の可視化を図った。）

特に本校スクーリング時に体験学習を行うNPO法人「里山文化ネットワーク」との連携や、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、感染防止に留意しながら縮小して本校独自に実施した「高萩駅前ロータリー清掃」「国道6号・国道461号・県道10号側道清掃」「高萩海岸清掃」でのボランティア活動や、「赤い羽根イラストボランティア」「心をつなぐ花壇づくり」等に積極的に参加することで、地域活性化と地域振興に繋げようと努めている。

経済効果については、市の税金、施設等の賃借料及び使用料、講師料、学校施設維持管理経費、教職員の日常生活費などで、約3億2千5百万円（宿泊施設が高萩市外へ変更になったこと等により、一昨年度比6千1百万円減）となっている。